

Title	March for Our Lives : 群衆の一人として見たキャピトルヒルの眺め
Author(s)	大門, 大朗
Citation	Co*Design. 2019, 4, p. 59-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71354
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

March for Our Lives : 群衆の一人として見たキャピトルヒルの眺め

大門大朗 (大阪大学人間科学研究科・デラウェア大学災害研究センター・日本学術振興会)

March for Our Lives: a view toward the Capitol Hill as a participant in the crowds

Daimon Hiroaki (Graduate School of Human Sciences, Osaka University/ Disaster Research Center, University of Delaware, USA/ Japan Society for the Promotion of Science)

2018年3月24日に全米を中心に、世界各地で行われた銃規制を求めるデモ「March for Our Lives」(MFOL)が数百万人規模で行われた。本稿は、MFOLの概要をまとめるとともに、筆者自らが群衆の一人としてその中心地、ワシントンD・Cでのデモに参加した際の概況を報告することを目的とした。ワシントンD・Cでのデモの参加したMFOLの経験からは、第一に、MFOLの運動全体は、主催者と参加者の呼応し、反響する声によって相互のコミュニケーションを伴っていたこと、第二に、MFOL全体の訴えを組織化するために、参加者の興味や関心を損なわせないための工夫(多様なプログラム、音楽、映像など)があったことが明らかとなった。3月24日に一つの盛り上がりを見せたMFOLの運動は、その後も全米各地で継続して行われており、社会運動における参加者と主催者の相互的な実践的側面は、長期的な運動の戦略においても注目される必要がある。

On March 24th, 2018, “March for Our Lives (MFOL)” were held in the Washington D.C. and across the nation in the United States, and at the same time millions of people rallied all over the world. This reports focuses on describing the MFOL in the Washington D.C., where the central field of MFOL was, while the author rallied in the demonstration as one of the participants. Through the field work, the two main features are mentioned; first, the movement of MFOL communicated not only from the core members of MFOL to the participants but also from the participants to the members through the collective voices, such as cheers, handclaps, and repetition; second, to engage the participants in the movement and unite the movement, the organizer tried to make the movement joyful using both (short and organized) speech and music, performance, or movies. Although the peak of MFOL reached on March 24th, the movements continues over the nations to change the gun control. On the whole, in the social movement studies, the dynamic aspects between organizers and participants are important in the long-term strategy.

キーワード _____ 銃規制、デモ、社会運動、アメリカ

Keyword _____ Gun control, demonstration, social movement, the United States

1 序文

1.1 はじめに

銃が合法的に所持可能なアメリカ合衆国において、近年再び銃規制を求める声が大きくなってきている。本稿では、こうした銃規制を訴えるアメリカの社会運動の中でも、2018年3月24日にワシントンDCを中心として、全米各地、また全世界でも展開された「March for Our Lives (命のための行進)」(以下、MFOL)について取り上げ、当日の様子を報告する。

はじめに、アメリカ社会における銃の状況を他の先進国と簡単に比較しておきたい。アメリカ合衆国における銃火器 (firearm) による死者数は、他殺・自殺両者ともに飛び抜けて高くなっている (図1)。その中でも日本は最も低い部類に分けられるが、その日本と比較すると、何らかの原因で銃によって死亡する10万人あたりの人数は、アメリカが23人に対し、日本が0.42人と54倍の差があることがわかる。特に、自殺を除いた他殺によるものに絞ってみると、アメリカが7.8人、日本が0.078人と実に100倍もの差となる。このようにアメリカにおいては、銃による脅威は、非常に身近なものであると言えるだろう。

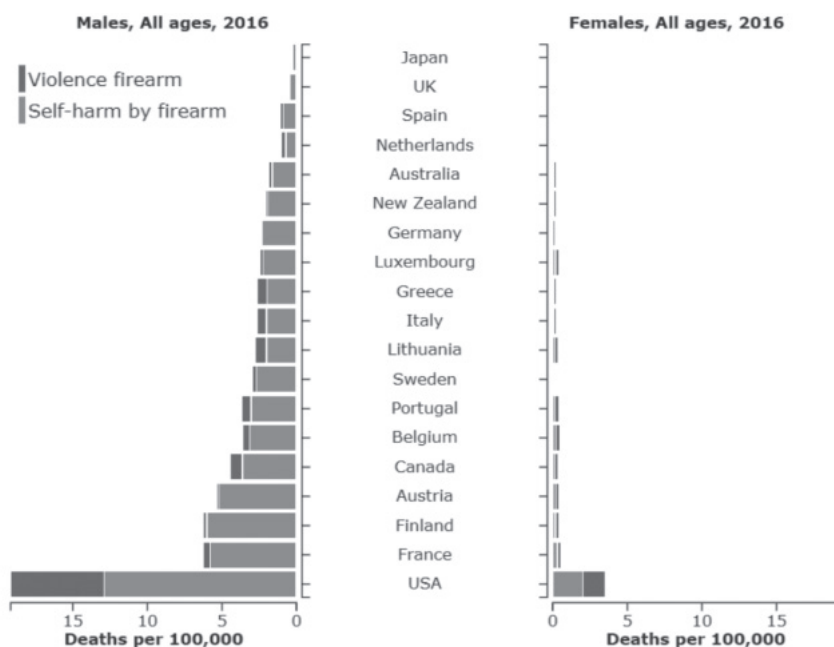


図1. 2016年における銃火器 (firearm) による10万人あたりの死者数の比較 (IHME [2018] のデータをもとに、Briggs & Fisher [2018] を参考にして作成)

銃が身近なアメリカ社会の中で、ここ数年、大きな問題となったのが、学校をターゲットとした銃撃事件である。図2は、「学校 school」「銃撃 mass shoot (ing)」のキーワードを用いて、英字新聞の記事を検索した結果であるが、2000年以降に記事の件数が大きく増えていることがわかる。その中でも、2018年に大きく記事が増加しているきっかけとなったのが、今回取り上げるMFOLの大きな出発点でも

あり、アメリカ社会の中でも転換点となった、2018年2月14日にフロリダ州のパークランドに位置するマージョリー・ストーンマン・ダグラス高等学校 (Marjory Stoneman Douglas High School、以下ダグラス高校) でおきた銃乱射事件である。

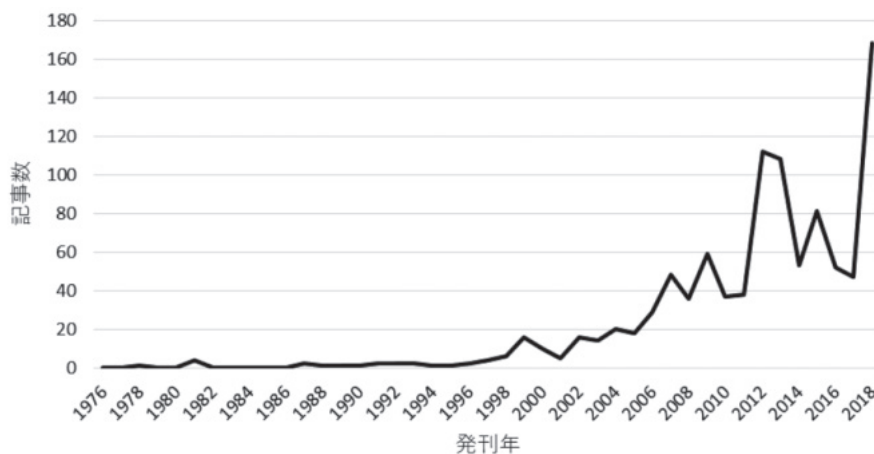


図2. 1975年以降の「学校」「集団銃撃」に関連した新聞記事数の推移

(記事検索データベースであるLexis Nexisにおいて、キーワード「school, mass, shoot/shooting」で検索し、上位1000件のものを年別に並べた結果を表示。対象となる新聞はデフォルト表示のものを使用)

この銃乱射事件は、ダグラス校の退学者である若者によって、水曜午後に同校で発生した。犯人は、自身の所持した銃によって、構内に侵入し、10分にも満たない間に、教職員3名、生徒14名の合計17名ものの尊い命を奪った。

その後、多数の犠牲者を出した事件の凶悪性や、そうした事件を起こすきっかけとなった犯人の生い立ちなども、メディアによって大きく取り上げられたのだが、その中でも大きな論争の一つとなったのは、犯行に用いられた凶器の自動性についてであった。犯行にはAR-15という半自動式小銃が用いられたのだが、これは発砲の際に自動的に銃弾が装填・排莢され、連射が可能な銃であり、短時間のうちに大きな被害を出すことができるものであった。

このような半自動小銃に加え、通常の小銃にも半自動化する装備道具は一般にも売られており、自衛の域をこえ、大量殺人を引き起こす可能性があるにもかかわらず、実質的な規制の対象には多くの州ではなっていない。そうした銃の自動化を制限する機運は、2017年10月1日ラスベガスにおいて発生した58名もの犠牲者を出した銃乱射事件直後にも一時的に高まったのだが、結局その後も大きな改革がなされることはなく、結果としてダグラス高校での乱射事件が発生することとなった。こうした背景には、政治家への献金やロビー活動を積極的に行う、全米ライフル協会(NRA)の影響があるのではないかとメディアの批判の対象となり、大きな社会問題へとつながっていった。

こうした機運の高まりに加え、2月14日の銃撃事件の発生にもかかわらず政治的な変革がなされないことに不満を持ったダグラス高校の生徒らが中心となり、3月24日にワシントンDCでデモ行進をすることが、2月18日に宣言された[Bruney 2018]。それはすぐに「March for Our Lives」という名称となり、

安全な学校と銃の規制をもとめ、アメリカ国内全土を代表する団体として組織が立ち上がった[Tampa Bay Times 2018b]。

もちろん、この運動の全国的な広がり、ダグラス高校の事件が一つの大きな引き金となったことは間違いない。しかし、このような学校をターゲットにした銃乱射事件は、ダグラス高校銃乱射事件の週だけでも、少なくとも7件の類似した事件が発生していた[Tampa Bay Times 2018a]。さらに、それにもかかわらず議会によって実質的な改革がなされないことへの不満も重なり、事件の発生したフロリダを超え、全米各地へこの運動は広がることとなった(例えば、The New York Times [2018] や The Washington Post [2018] など多数)。それは、ダグラス高校を確かに象徴的な事件としていたが、フロリダにとどまらない大きな動きを形作っていった。

一般メディアでの広がりに加えて、銃規制を求める運動は、MFOLの学生らを中心に、盛んにソーシャルメディアを用いて拡散されていった。こうした背景は、3月24日に行われるMFOLのデモ行進まで続く動員の手法であったとすることができるだろう。実際に、MFOLのフェイスブックのイベントページを介して、ワシントンDCだけにとどまらず、数百を超える全米各地の都市で、さらに日本を含む全世界で展開された。こうしたソーシャルメディアをもちいた社会運動の動員は、MFOLの一連の運動直前に起こった、アメリカ国内での「Black Lives Matter」、「#Me too」、「the Women's March」など比較的大規模な運動によって、社会の中で経験され、準備されていたものでもあった[Yammine et al. 2018]。

MFOLの運動は、デモ行進まで1ヶ月ほどの準備期間しかなかったものの、運動に賛同する人々や企業からもすぐに多額の寄付が集まった。例えば、MFOLのデモ行進がアナウンスされてから数日後の2月22日には、ハリウッド俳優のジョージ・クルーニー氏と妻のアマル氏によって50万ドルの寄付がなされ、それに共鳴した映画監督のスピルバーグ氏らを含むハリウッド界の人々へも寄付の波が広がっていった[The New York Times 2018a]。また、3月23日には、イタリアブランドメーカーのGucciも50万ドル、さらに、SalesforceのCEOのマーク・ベニオフ氏と、慈善活動家のエリ・ブロード氏からもそれぞれ100万ドルずつの寄付が寄せられ、MFOL自らもインターネット上(GoFundMe)で300万ドルの寄付をつのるなど、人々の動員だけでなく、資金的な側面においても、大きな社会運動となる土壌が作られていった。

1.2 本稿の目的

ここまで、MFOLが形成される契機やアメリカ社会全体へ広がっていった経緯を簡単に説明した。本稿では、その中でも、MFOLそのものの名称でもある3月24日に行われた「(デモ)行進March」への参与観察を行った結果をもとに、一参加者が主催者とのように結び付き、一つのデモとして統合されていったかについて内在的に明らかにすることを目的として報告する。特に、社会運動の中でもデモという直接的な形態に参加するという経験がどういふものであったかということ、そして、MFOLを形作る群衆とMFOLの主催者との相互行為の中で、MFOLそのものがどのように更新されていったのかと

いうダイナミックな側面について記述する。

著者は、一参加者として、2018年3月24日に行われた、デモ行進の中心地であるワシントンDC（以下、DC）のMFOLに参加した。DCで開催されたMFOLは、3月24日正午から午後3時までの間、開催された。その間にはできる限り参加することに重点をおいたが、MFOLのイベントの時間だけでなく、参加前後の行動経路なども含む必要箇所では簡単なメモと写真を撮影した。また、当日のうちに簡単なフィールドノートを作成し、後日その内容をエスノグラフィーとしてまとめた。なお、当時著者は、DCから、電車で北東に1時間半ほど離れたデラウェア州に在住しており、3月24日の午前には鉄道を使い、DCのMFOLへ参加した。次節中では、著者の一人称は「わたし」を用いている。また、MFOLには、DCに在住の知人と合わせて2名で参加し、自身も一参加者として銃規制を訴えることを目的として参加した。なお、著者は、国内外を含めて、初めてデモ行進に参加したことを付言しておく。

2 | ワシントン DC の March for Our Lives の報告

3月24日午前8時47分発の北東地方便（Northeast Regional）に乗り込み、わたしの住んでいる街デラウェア州ニューアークを出発した。その日は、吹雪いてこそいかなかったが、強い風が吹けば雪が舞うほどの、まだ3月にしてはずいぶん寒く、コートと手袋がないと凍えてしまうほどの寒さであった。予定通りにいけば、1時間半ほどでDCにつくののだが、今日の参加者数は数十万人、あるいは100万人近い人がくるという前振りもあり、現地での電話回線の混雑を避けようと、電車の中で携帯電話を使い何度も地図を確認した（図1）。デモの参加者数からも、入場する入り口が数箇所に制限されるなどの交通規制がかけられるということがすでにアナウンスされており、到着する駅から入場可能なゲートを探した。



図3. March For Our Lives主催者らの作成した当日の地図

（地図上で濃く塗り潰された通りがデモ行進の会場であり、人の図が書かれた場所が入場箇所である。筆者は、地図上右端の駅（Mと表記）から会場へと向かった）

到着したユニオン駅は、すべての路線が同じ向きで駅に繋がるターミナル駅の構造になっており、DCの玄関口として機能している。それは、いよいよこれからデモに参加するのかと、入り口に立った気持ちにさせてくれるものであった。10メートルはあろうかという吹き抜けとなっている西洋風のコンコースにでると、そこには「Make America Safe Again」、「Not Repeat A mess」¹⁾と工夫を凝らしたプラカードをもったデモ参加者が、待ち合わせ



写真1. ユニオン駅でテレビクルーらのインタビューを受けるデモ参加者

せのために混み合っていた。友人はまだ来ていないようだったので、外の様子を少し見ようと、回転ドアを抜けると、そこにはデモ参加者だけでなく、テレビ中継のためのクルーや、デモに乗じた露天商——多くは黒人——の人たちがいた(写真1)。デモが始まりそうだ、という雰囲気が当たり前だが漂っていたが、ひしめき合うほどの人ではなかった。

一緒にまわるようになっていた友人とはすぐに合流することができた。ユニオン駅の正面入口を出るとすぐに、小さな広場があり、そこでは黒人の人々によってさまざまなグッズが販売されていた(写真2)。「March for Our Lives」と書かれたTシャツに缶バッジ、「Stop Gun Violence」と印刷されたステッカー。この一週間ほどで作ったのだと思うのだが、工夫を凝らしたグッズが露天に並んでいた。わたしたちもなにか買ったほうがいいのではないか、ということになった。結構種類が豊富だったのもあり、いろいろと迷った挙げ句、「Just Say No, To Gun」と書かれた手旗を買った(写真3)。



一つ10ドルで、合わせて20ドルだった。少し高いような気もしたが、それよりもアジア人の自分がデモの参加者となり、溶け込みたいと思う気持ちの方が強かった。手旗はちょうどデモ参加者をアピールするのによかった。わたしたちが購入する間にも、複数の人が、缶バッジやTシャツを購入していた。



写真2. ユニオン駅ターミナル付近でデモのグッズを売る露天商

ユニオン駅を出ると、小さな公園が見

える。ここからユニオン駅から、一番近いデモ行進の入り口まで2キロは離れた場所であるにもかかわらず、すでに信号の待ち時間になると、歩く人々がせき止められて、人だかりができてはじめた。ルイジアナ通りとDストリートがぶつかる交差点を曲がる頃にはすでに、デモのボランティアと書かれた蛍光色の黄緑色のシャツを来たスタッフが誘導を行わねばならないほど、多くの人が集まっていた(写真4)。



写真3. 著者らが購入した手旗
(マガジン部分はフロリダ半島を模したものである)



写真4. ユニオン駅から会場へ向かう信号待ちの人々

Dストリートに入るとすでに歩道は人で溢れかえていた。ほぼすべての人がデモ参加者と思しき人であり、ざっとみても、半数かそれ以上は女性や子供づれの参加者であった。そこでは、膨大なデモ参加者がプラカードをもってすでに行進していた。赤やオレンジのような目立つ色を使ったものやこだわったデザインのプラカードが浮き沈みするようすは、その参加者の多様性を表すようでもあった。路上を見れば、少なくとも10台以上の大型バスが止まっており、このデモへ参加するためにプラカードを持ってバスからでてくる人の姿が見受けられた(写真5)。一体どれほどのひとがこのデモに参加しようとしているのだろう。このMarch for Our Livesの出入り口は限られていると述べたが、そのための規制線は、まちなかのいたるところにいくつも張り巡らされていた。ちょうど、わたしたちが通った規制線には、これまでに銃によって亡くなった人々を追悼するため、あるいは銃規制への訴えのために、ラミネート加工が施された個人写真がいくつも掛けられていた(写真5、右)。



写真5. 郊外から来たマイクロバス(左)、規制線に掲げられた写真(右)
(掲げられた写真は、過去の銃撃事件で犠牲になった人々と思われる)

ざっと見積もっても数千の人々が入場を待っていた。いな、きちんと、実際に、数千人の人々がいると見たのは、7番通りに面した広場、インディアナプラザにある、小さなモニュメントに登ったときであった(写真6)。多数の人がそこにいることはわかったのだが、もはや足の踏み場もなく、前に進むのも身動きするのも困難なほどそこには人が集まっていた。ちょうど入り口は、国立アーカイブと連邦政府庁舎が見えるペンシルベニア通りのあたりで、そして、もうその2つの建物も見えているのだが、パタリとそのあたりから進むことができなくなってしまった。もうすぐそこが入り口だという期待となかなか進まない苛立ち、そしてこのまま仮に入っても前に進むことが果たしてできるのだろうかという不安の入り混じった複雑な気持ちになった。



写真6. インディアナプラザに押しかけたデモ参加者

しかし、多くの参加者らも、それが進まないということを心得ているようで、前へと進む代わりに、その場で、各々のプラカードを高く掲げ始める人々の姿も増え始めていた。そうしてふと周りを見渡すと、会場に入ることができない人々によって埋め尽くされた小さな広場には、ピンクの花を咲かせた木が満開で、わずかに巻層雲だけが残る晴れ渡る空が見えた。様々な色で埋め尽くされた群衆とのコントラストは、さながら印象派の点描画のように美しい景色でもあった。

「こちらの入り口は封鎖されたい」と、誰かが言っているのを聞いたと知人が教えてくれた。その信憑性はおいておいても、これ以上はどうやら進めない、それなら北側の入り口から入るよりも、地下鉄

で会場の下を通り抜け、反対の南側に回って見たほうがいいのではないかと。時刻はもう12時である。そして、デモのスタートも12時だ。

わたしたちは、すぐ駅へと目指すことにした。そうして地下鉄の駅を目指し、逆走する間にも数千という人々とは少なくともすれ違ったと思う。文字通り、人波の中をかき分けるようであった。

ちょうどデモの行進会場をぐるぐるとして南側にあるのは、L'Enfant Plazaという駅である。わたしたちは、地下鉄を使って、ちょうど反対側へ抜けたのだが、すでに、こちら側からも、たくさんの人が参加していることがわかった。地下鉄の出口はいくつかあるのだが、どちら側から出れば会場にたどり着くのかを見分けるのは簡単だった。それは単に、人が多い方に行けばいいだけであったからである。もちろん地下鉄の改札はすでに混雑していて、普段なら、歩いて上ぼる人のために右側ばかりに偏るはずのエスカレーターが、今日ばかりは両側いっばいに広がって足の踏み場もないほどの人を絶えず運び出していた。わたしたちも、地下鉄の地上出口から、文字通り湧き出るように出てくる人々の一部となって出ていった(写真7)。



写真7. L'Enfant Plaza駅の地下から地上にでる人々(左)、地上の様子(右)

この調子なら見えるところまではいけそうだと感じるほどに、会場の南側は比較的大きな通りであった。そして、すでに警察によって道路は封鎖されていたが、北側ほどごった返しているわけではなかった。空いたスペースでは、テレビ局の取材スタッフも多く待ち構えていた。思い思いの工夫を凝らしたプラカードは、テレビ局のインタビューを受けるための格好の材料のようだ。ワシントンD・Cの中心部には、ナショナル・モールという大きな公園が東西に走っている。その公園を突っ切る形で、400メートルほど緑色が広がる芝生の公園のゾーンを越えて歩いていくと、先程まで反対側から見ていた人だかりが見え始めた。右側を向くと、1キロほどさきにキャピトルが見えた。

公園を超えたところはまだ、デモ会場となるペンシルベニア通りである。時刻は12時を20分ほど回った頃で、イベントのスタートが12時であったため、すでに会場からは、大きなマイクの声がすでに鳴り響いていた。

博物館や政府の建物が数多く立ち並ぶペンシルベニア通りには、その隅々までもはや群衆としか呼べない人の一群が見えた(写真8)。冬には少し寒い灰色のパーカーを着た若い黒人の男性、自転車のヘルメットをかぶったまま、遠くを見ようと母親に肩車をしてもらっている男の子、銃撃に心を痛めた様

子で遠くを見つめる主催者ら高校生と同年代と思しき女子学生のグループ、演説の中もたわいない会話をやめないドレッドヘアの女性の親子、時折流れる演説の中の歓声に合わせて拍手と歓声をあげる白髪男性——そうした人々、そしてそれを表す一つの言葉はただ「群衆」としか表すことのできないような多様な人々の集まりがそこにはあった。そして、その中のひとりが、さきほど10ドルで買った銃規制を求める旗をふるアメリカ在住のアジア人であるわたしでもあった。



写真8. MFOLの行進会場であるペンシルベニアアベニューの様子(左手に見える建物はニュージャム)

会場の中では、数十秒に数回のペースで、歓声と拍手が入り混じった声が聞こえてくる。多くの参加者を想定し、自分の場所からメインステージが見えない人々のために、大きなスクリーンが数百メートルごとに設置してあった。その上に、十数個の黒色のスピーカーが吊り下げられ、演説者の声が拡声されていた。「Like a skyscraper, like a skyscraper...」最初にわたしたちに聞こえてきたのは、演説ではなく、音楽とそれを歌う女性の歌声であった。わたしには誰かわからなかったが、透き通るような声が会場中に響き渡っていた。ちょうどペンシルベニア通りの群衆から演台の方を見ると、その奥にキャピトルが見えるようになっているのだが、多くの人は、そちらのメインステージを向くのではなく、むしろ、スクリーンに同時中継されて映し出された女性とその声に耳を傾けていた。実際に、ここから500メートルほど先に行かないと見えない位置にメインステージは設置されていたようであるが、多くの参加者がひしめき合う中で目視することはできなかった。

身を横にしたり、時折止まったりしながら、わたしが自分のスペースを見つけ、スクリーンを見つめたときには、主催者の高校生の一人が演説を行っていた(後から調べてわかったことだが、高校生のEdna Chavezという女性であった)。演台のあるステージに「March for Our Lives」と掲げられた横断幕と思しきものが見えた(写真9)。人が多く、これ以上は近づけなかったが、そこに確かにいるのだと思うと、自然と演台ではなく、映像の流れるスクリーンに目を向けることができた。彼女は銃撃によって弟を失ってしまったこと、そしてそれが



写真9. 筆者らが演説を聞いた場所からの眺め(中央奥に見えるスクリーンとスピーカーからは、メインステージの演説の様子が同時中継されている)

彼女の住むロサンゼルスではいかに日常的なことなのかを語ってくれた。彼女はおそらくスペイン語も話していた。言葉につまりながら、そして、群衆はそれを拍手や歓声で励ましながら、彼女のスピーチは続いた。彼女のスピーチは悲しみの共感には十分なものだった。

スピーチが終わったので少し場所を移動すると今度は、別の高校生が演説を行いはじめた(彼は、高校生のDavid Hoggという男性であった)。彼の演説の切れ目に、波のように声がわきあがってくる。先程の女性もそうであったが、その言葉が群衆に響いたどうかは、拍手と歓声の大きさを見ればすぐにわかる。決して全員が一斉に大声をあげるわけではないし、そして、まったく誰も支持せず黙り込んだりブーイングがおきたりするような極端なものでもない。むしろ、想像以上に地味なものである。2割か3割くらいの人が復唱したり、拍手をしたりしていればそれなりに大きな歓声になる。半分もいけば、あたかも全体から発せられた声のように相当な声量となって聞こえるだろう。メインステージの演台から放たれた言葉は、スピーカーを通じてペンシルベニア通りにいる人々全てに伝わってくるとはいえ、それには時間差もある。演台から波のように、ペンシルベニア通りの端から端へと波のように伝わる歓声やフレーズもあれば、そうでないものもある。少なくともそこでわかるのは、そうした声は、ある種の群衆の主張の強度を表しているということ、そして、デモは演台に立つ主催者らの一方的なコミュニケーションではなく、手法は異なるものの相互的なコミュニケーションとなっているということである。

もちろん群衆は、投票を行うわけでもなければ、何か共通のメッセージを放つよう指示されているわけでもない。単に、「命のための行進」をするということだけで集まった人々である。ところが、この群衆にとっての何かがある種のメッセージ性を帯びてくるとすれば、それが共感を呼ぶような演説とそれに伴う強度の——つまり、みなが口ずさみ、歓声を上げ、そして拍手喝采となるような——声となるときである。つまらないことには群衆は無視を決め込むし(意識しているわけではないにせよ、自ら復唱するほどでもない)、一方で、共感されることは反復される。その意味で、Hoggの演説はわかりやすかった。「No more!(もうたくさんだ!)」これが彼の演説の要所に挟み込まれていて、デモ参加者ら群衆にとってのスピーカーの役割を果たしていた。しかし電源は、人々の共感によるものである。わたし自身もふいに「No more!」と口にしてしまっていた。そうして、一瞬一体感が生まれたかとおもうと、それはまたたち消えて、各々のペースでデモに改めて参加することになるのである。

もう一つ印象的なコールは、「Vote them out!」であった。これは、参加者の中から自然と湧き上がってきたものなのか、ある種のシュプレヒコールなのか最後までわからなかったが、演説者と演説者の間のインターバルの時間に、どこからともなく聞こえてくるものであった。最初はわたしもなんとやっているのかわからなかったのだが、徐々にその意味を理解することができた。それは、銃規制に反対しない議員に投票をするな、というメッセージである。

Hoggの演説が終わると、すぐに次の演説者に切り替わった。おおよそスピーチは5分から、長くても10分、そして、その間あいだに、演説だけが続かないように、銃の被害を訴える動画が流れたり、パフォーマーとして呼ばれた歌手やグループが音楽を披露したりする。それは、ある種の政治的なメッセージを含んだ、ライブパフォーマンスさながらである。それは、いかに群衆を惹きつけたまま、それを一つの

一連の運動としてまとめていくかという工夫が凝らされなければならないようでもあった。数百メートルごとに並べられたスクリーンには、同時に演説内容が文字起こしされ流れ、四方を向くよう高く吊るされたスピーカーからも音声が流れてくる。

ふと目の前のこどもが飽きたのか寝そべり始めた。ほとんどの人が立っている中で歩き疲れたのだろう。わたしも周りの人もそそくさとスペースを開け、二人の少女が寝そべるためのスペースを開けた。母親と見られる女性は自分のこどもが踏まれないようにパリケードのように守りながら演説を聞いていた。わたしたちもう一度顔を上げた。

12時から始まった演説も、立ちっぱなしで聞いていると疲れてくるものである。いかに工夫が凝らされているからといって、疲れや飽きがくるのも事実である(それはわたしが英語で演説を聞くことに疲れたからかもしれない)。結局演台のかなり近いところまで(おそらく200メートルほど)はいったものの、それ以上行く意味も、結局の所スクリーンの方が見やすいということもあり、それ以上接近することはなかった。デモ開始から、1時間半ほどたった13時半ごろだった。ふと後ろを振り返ると、ニュージアムの建物の屋上にいる(デモに参加しようとしているのか、単に眺めているのかわからないが)人々の姿も見えた。ふいに、その時、群衆の全体像が見えたような気がした。おそらく、全米各地、はたまた全世界に放映されるデモ行進の映像を想像した。一体どれほどの人が参加しているのかわたし自身も測りかねていたが、知人いわく「トランプ大統領の就任演説のときよりももしかしたら多いかもしれない」ということであった。わたしにはピンとこなかったが、かなりの人がデモに参加していたであろうことは容易にわかった。

後ろ向きに進み始めると、不思議な空間があるのがわかった。そこだけ中空のようにスペースが空いているのである。ちょうど演台とキャピトルが見渡せる位置なのだが、スクリーンの関係と、もしかするとメディアの撮影カメラの位置関係上、多く見せるためにテレビ局のビデオカメラよりも手前に残ろうとしたことによるのかもしれない。

そこには、歩行者信号がぼつんと立っていた。ただただ、残りの秒数をカウントしながら、歩行者信号が変わり続けていた。DCの街は機能しようとしているのだとその信号機からメッセージが発せられているようであった。ここは普段なら、きちんと信号が変わらなければ道路を渡れないほどの街なのだ。しかし今日は、この歩行者信号は、群衆の中にぼつんと立っただけである(写真10)。初めて見るメインステージをそこから眺めていると、体に似合わないほど立派な一眼を抱えた一人の少年が「写真を撮ってもいいかい」と近づいてきた。もちろんOKして、写真を撮ってもらった。記念写真でも取るにはちょうどいいスペースがぼっかり空いていた。



写真10. 点滅する歩行者信号(多くの人々が集まったワシントンDCのまちなかで、もはや不必要な役割を懸命に果たす姿は無駄というよりも、大変滑稽なものである)

そのころにはデモのピークは超えたようであった。われわれのように、とくにきっかけもなく帰路につく人もちらほらと見え始めていた。わたしたちも、壁沿いに入ってきた道を今度は逆走しながら、徐々に戻ることになった。終わりになって人々が一気に帰り始めると大変な混雑になると考えたからである。

「今日はもうひとり特別ゲストがいます!」ちょうどそのころ、演台から声が響いた。誰だろうと思いがながらも、歩く流れを止めるわけにもいかず、半分耳を貸しながら、歩きつづけた。「わたしは、孫娘です。マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの!」その時、演台から通り全体をまさに電気でも走るかのように大きな歓声が響き渡った。わたしも、大きく振り向いた。そして多くの人が足を止めた。キング牧師の孫娘が登場したのだ。観客も今日一番の大きな歓声があがった。

「わたしの声を繰り返してくれますか」そう呼びかける彼女。「Spread the world」「Spread the world」、「Have you heard」「Have you heard」、「All across the nation」「All across the nation」、彼女の声に合わせて群衆がこだまする。「We」「We」、「are going to be」「are going to be」、「a great generation」「a great generation」。わたしも、その周りの人も、一度足を止めてその方向を向いた。数分の短いスピーチだったが、まさに演台から波のように、繰り返されるスピーチがペンシルベニア通りへと広がっていった。そして、演説が終わると、帰路につく人も一段と増えたように思えた。

1時間もするとどんどん人はいなくなっていった。わたしも、ナショナル・モールの広場を抜けたあたりで航空宇宙ミュージアムの前の階段に腰掛けて休んだ。まだ、イベントは行われているから、低音のビートを刻む音と、時折上がる歓声が数百メートル先のわたしの方まで聞こえてきた。「なにかイベントでもやっているの?」おそらく観光に来ているだけの女性の声が聞こえてきた。ちょうどここから会場は、高い政府の建物が多く立ち並んでいてその様子をうかがい知ることができない。実際に、遠くから音だけを聞いていると、ただ単なる「音楽フェス」のようにも思えてくるのであった。

3 | 当日の MFOL の報道など

前節では著者がMFOLに参加した際の光景をできる限り、一参加者の視点で記述することに努めた。そこでの経験について、考察を加える前に、本節では、簡単に、当日のMFOLの報道やそれに関連した論文、また、その後のMFOLの活動について簡単に触れておきたい。

ワシントンDCで行われたMFOLのデモは、その中心地ということもあり、テレビ、新聞などの多数のメディアに加え、YouTubeなどのインターネット上のメディアによっても同時中継された。ワシントンDCのデモ参加者は、報道機関・主催者の発表によって、20万人～80万人とばらつきはあるものの、アメリカ国内でも近年稀に見る最大規模のデモであったと報道された²⁾。

こうしたMFOLの動員の構造や参加者の特徴はどのようなものであったのだろうか。現段階では、

他の社会運動と比較し分析したものはまだ数少ないが、MFOLの参加者の特徴について言及したFisher [in progress] は、ランダムに抽出した256人の参加者の属性を分析し、次のように指摘している。参加者の70%は、女性で(2017年のウィメンズ・マーチは85%が女性) 子供の割合は10%に満たなかったこと、また、72%以上が大学卒以上の高学歴者、89%が前回の大統領選でヒラリー・クリントンを選んだりベラル層であったことである。合わせて特徴的であったことは、その動員された人々のうち、27%の人々がデモ自体に参加するのがはじめての人々であり、一般的に政治的な関心が低い人々であったことである(Fisher [2018]も合わせて参照のこと)。MFOL自体は、多くの人々が参加したが、著者のようなデモに参加することがはじめての人々も巻き込む、広い動員の構造を持っていたことがわかる³⁾。

また、ワシントンDCだけでなくMFOLの運動は、全米各地の数百の都市、全世界の主要都市をあわせると約800箇所と同様のデモ行進が行われた。その様子は、アメリカ国内だけでなく、広く全世界的に報道がなされた(例えば、The Guardian [2018])。日本国内においても、東京や名古屋で実際にMFOLのデモ行進がなされ、当日のデモの様子も複数の国内メディアが報道した[東京新聞 2018; 毎日新聞 2018; 朝日新聞 2018; ロイター 2018; CNN.co.jp 2018]。

3月24日に全世界的に広がったMFOLの運動は、概ね成功を取めたとと言えるだろう。しかし、MFOLを組織する学生を中心としたメンバーたちは、単に、デモ行進を成功させることを目的としているわけではなかった。むしろ長期的な社会変革を目標として、継続した運動を展開することを目的としていた。もちろん、彼らによるこの運動は、2018年7月現在でも継続されているが、一例を挙げれば、3月24日の翌週にも、全米各地でタウンミーティングを開き、そこで地域の政治家を招き(拒否した場合は、その対立候補を招待する)、銃規制に関する意見を表明してもらい運動を展開した。それは、学生が主導する運動であるにもかかわらず、具体的な政治的・社会的変革の10の明確な目標「How We Save Lives」を掲げ、現在も銃規制を展開する活動を継続している(表1はそうした彼らの銃規制の要求のリストである)。

表1. どのようにして命を守るのか「How We Save Lives」
(<https://marchfourlives.com/policy/>より項目のみ抜粋)

1	銃被害研究への投資	6	[銃規制] 介入プログラムへの投資
2	ATF*の不合理な規制撤廃	7	極端なリスクからの保護命令
3	普遍的な経歴確認	8	あらゆる国内虐待関与者への銃剥奪
4	大容量マガジンの禁止	9	銃の[所有者]追跡
5	路上での射撃制限	10	安全な保管と盗難報告の義務化

*アルコール・タバコ・火器及び爆発物取締局の略称

4 | 考察

まとめにかえて、鳥瞰的な視点からみたMFOLのデモ行進ではなく、一参加者として微視的な視点から著者が報告したMFOLのデモという観点から、考察を行う。

4.1 デモ行進におけるコミュニケーション：参加者と主催者

今回のワシントンDCで行われたMFOLの場合、参加者が少なくとも数十万人以上であったため、実質的には行進を行うことは不可能で、大半の時間は主催者らが用意したメインステージ上でのプログラムに沿う形で、それを聞く参加者らがデモを行うというものであった。

しかし、ステージ上の主催者と路上の聴衆という非対称な関係の中でも、主催者（ないし登壇者）からの一方的なコミュニケーションだけが行われていたというわけではなかった。そこでは、聴衆らの拍手や声援、登壇者らの演説の復唱といった形で、主催者らへその演説や方針、銃規制への批判がどれほどの的を射ているかが示されていた。もしそれが共感を伴わない場合、主催者らに対しては、単に聴衆らの無関心という形で投げ返されるし、聴衆らが盛り上がれば、逆に主催者らへ関心が高いことが伝わっていくのである。MFOLという運動主体は、そうした相互行為の中で、構成・構築あるいは分解・散開しながら再形成されるプロセスを描くものであった。

4.2 人々を惹き付ける工夫とデモの楽しさ

こうした参加者らと主催者らのコミュニケーションのダイナミックな側面を、主催者ら自身も自覚していることの証左は、そのプログラムの構成にも現れているといえるだろう。つまり、いかに人々を飽きさせずに、惹き付けることの重要性についてである。

プログラムは、演説だけでなく、動画や歌手らのライブパフォーマンス、キング牧師の孫娘のサプライズ登場など、3時間の中で様々な仕掛けが用意されていた。それぞれの演説も10分から15分ほどに留められ、人々を飽きさせない工夫がなされていた。デモを通して盛り上がる場面もあれば、そうでない場面、一体感を伴ったと思えばまた別の瞬間には消えてしまう、そうした抑揚が見られていたのである。もちろん、そうした工夫にもかかわらず、著者らを含め、1時間半ほどすると、参加者の中の一部（特に子ども）は疲れはじめ、徐々に帰路につく人々も見られていたのも事実である。

つまり、人々の興味をそそるような楽しさと、それが政治的に変革へとつながっていくという目的をいかに乖離することなく、主催者らと参加者の間で調整していくか（されていくか）ということが運動をまとめていく上で重要な問題となっているということである⁴⁾。もちろん、その運動が政治的な変革につながるためには確かに、数多くの人が集まり、一つの訴えを起こすことは重要である。しかしそのことは、単にこのデモが「銃をなくす」という主張をするだけのためのものにとどまらず、参加した人々をまとめ、次の政治的な行動へとつながっていくことを直接意味するわけではない。そのために何らかの人々を引きつ

けるような——それは非常にまじめな演説のような方法だけではない——やり方が取られていたということである。それは、民衆を扇動し、デモを盛り上げるというやり方とは異なる、政治に参加するという行為の楽しさに焦点を当てたものであった。

ここで強調しておきたいのは、政治的な訴えと政治参画への楽しさの2つが別々のものとしてあり、主催者はそれらをゼロサムゲームのように捉えてはいないということである。むしろ、主催者らの実践はそれらを1つのものとして統合し、注意深く調整することそのものにあつたように思われるのである。そこでは、デモがもつ議題設定効果という側面だけでなく、それが長期的な社会変革へと続くことができるのかどうかという大衆との相互承認をおこなうための相互的な実践、つまり、デモが一つの主張——ここでは、MFOLが提示する「銃規制」——へと現実的にも統合され、一つの合意形成へと徐々にいたるための、動的かつ不安定な実践的側面をもっていたということである。

5 | おわりに

学生たちを中心として、2018年3月24日に行われた全世界的なMFOLのデモの後も、アメリカ社会において、銃規制に関する政治的な進展はまだまだ十分に進んでいるとはいえない状況である。こうした中でも、MFOLを中心としたメンバーたちが、長期的な展望（例えば、選挙）をもち、デモだけでない多様な実践を行っていることから、日本における民主主義の実践においても学ぶことが多いと思われる。本稿では、運動全体を客観的な立場から記述するという形式を取らず、運動の内側に著者自身が身を置き、一個人の主観的な立場から記述するという形式を取った。確かに第三者から見ればすでに統一された政治的な主張のために集まってきた人々によってデモは構成されているように見えるけれども、こうした内在的な記述から見えてきたことは、周縁部に置かれた人々を退屈させることなく、一つの運動としてまとめ上げるかという群衆と主催者の間の調整行為によってデモがまさにデモとしてまとまっているということであった。

もちろん今回対象としたデモにはすでに多くの記事や映像が出ており、デモの概要について多くのことを知ることができる。しかし、そうした単一の形でデモが表象されてしまうことで、どのようにしてデモが調整されるかという実践的な側面が欠落してしまいがちである。本稿の意義は、あくまでも一参加者と主催者の相互作用について記述することで、運動中の多元性を示し、欠落しがちなデモの調整という側面を照射したことである。一参加者としての視点が社会運動の役に立つことを願いつつも、少しでも銃による犠牲者が減ることを願い、本報告をわたし自身の実践報告としたい。

脚注

- 1) 「Make America Safe Again」はトランプ大統領が選挙キャンペーンで用いた「Make America Great Again」を、「Not Repeat A mess」はアメリカライフル協会の頭文字NRAをもじった言葉遊びである。こうした言葉遊びのプラカードは、デモ参加者らによく用いられていた。
- 2) マンチェスター・メトロポリタン大学のG. Keith Still教授は18万人と[The Washington Post 2018c]と推定しているが、MFOL主催者らは80万人と発表しており、大きな開きがある。また、その間ほどの値として40～50万人ほどという推定が多く見られる(例えば、Reilly [2018])。いずれにしても詳細な数字は明らかではないが、具体的にアクセス可能な数字である3月24日のワシントンDCの地下鉄の利用者数を見てみると、通常の土曜の約2.5倍にあたる558,735人の人が利用していることがわかる。これは、トランプ大統領就任式の際(ただし平日)の数字が570,557人であったことと比較しても、MFOLの規模はかなりの規模であったと推察される[The Washington Post 2018b]。なお、2017年のウイメンズ・マーチ(ただし平日に開催)の際は1,001,613人であったと報じられており、MFOLの際の利用者はこれの約半数であったことがわかる。
- 3) その他にも、いくつかの学術雑誌で、MFOLに関していくつか言及されたものも見られるが[Black 2018; Swartz 2018; Yammine et al. 2018; Phillips 2018; Rogers et al. 2018]、2018年7月現在、社会運動の立場からまとめた分析がなされたものは管見の限り見当たらなかった。
- 4) 実際に、もともと多数の人々が集まることとなった人類の歴史的な起源を遡ると、むしろ「どうすれば人々が集まりたくなるか」という動機の部分に腐心していたということが明らかになっている[グレーバー 2011=2016]。そこでは「どうすれば人々をまとめていくことができるか」という手法が問題となっていたのではない。

参考文献

- 朝日新聞(2018)「『6分20秒間で…』若者ら演説 銃規制行進に80万人」(2018年3月25日)。
- Black, Holly P. (2018) “Closing the Relinquishment Gap : How Removing Firearms from Abusers Reduces Domestic Violence against Women Closing the Relinquishment Gap Domestic Violence against Women,” *University of Tennessee Honors Thesis Project*.
- Briggs, Adam D.M. and Elliott S. Fisher. (2018) It’s time for a change of message, it’s time for #GunSafetyNow. *The Lancet*, 391 (10128):1353.
- Bruney, B. Y. Gabrielle (2018) “Survivors of the Florida School Shooting Are Planning to March on Washington: ‘We are going to be marching together as students, begging for our lives’.” Retrieved July 25, 2018, from <https://www.esquire.com/news-politics/a18223160/florida-school-shooting-march-on-washington/>
- CNN.co.jp. (2018) 「全米800カ所、数十万人が大規模デモ 銃規制求め行進」<https://www.cnn.co.jp/usa/35116631.html> (アクセス日2018年7月26日)

- Fisher, Dana R. (in progress) *From the Streets to the Districts*. Retrieved July 26, 2018, from https://theamericanresistancebook.files.wordpress.com/2018/07/chapter3_fromthestreetstothedistricts_final.pdf
- Fisher, Dana R. (2018) "Here's who actually attended the March for Our Lives. (No, it wasn't mostly young people.)." *The Washington Post*.
- Greaber, David (2011) *Debt: The First 5, 000 Years*. New York: Melville House. = (2016) 酒井隆史・高祖岩三郎・佐々木夏子(訳)『負債論：貨幣と暴力の5000年』以文社.
- IHME (2018) "GBD compare data visualization." 2018. Retrieved July 23, 2018, from <https://vizhub.healthdata.org/gbd-compare/>
- 毎日新聞(2018)「命のための行進」:全米各地で100万人 銃規制強化求め 毎日新聞(2018年3月25日).
- Phillips, Charles. D. (2018) "The Politics of Firearm Safety: An Emerging New Balance of Power." *American Journal of Public Health*, 108 (7) :868-870.
- Reilly, Katie (2018) "Here's the Size of the March For Our Lives Crowd in Washington." *Time*. Retrieved July 26, 2018, from <http://time.com/5214405/march-for-our-lives-attendance-crowd-size>
- Rogers, Melanie, Ericka A. Lara Ovares, Olushola Olaitan Ogunleye, Tara Twyman, Cem Akkus, Kalpita Patel and Marwa Fadlalla (2018) Is Arming Teachers Our Nation's Best Response to Gun Violence? *The Perspective of Public Health Students. American Journal of Public Health*, 108 (7) :862-863.
- ライター(2018)「『命のための行進』、P・マッカートニーやA・グランデも参加」(2018年3月25日).
- Swartz, Martha. K. (2018) "Why is it Different This Time?" *Journal of Pediatric Health Care*, 32 (3) :213.
- Tampa Bay Times (2018a) "AFTER KILLINGS , PRAYERS ARE NOT ENOUGH." *Tampa Bay Times*, 10.
- Tampa Bay Times (2018b) "PROTESTERS TO POLITICIANS WHO TAKE GUN LOBBY MONEY : 'WE CALL BS'." *Tampa Bay Times*, 5.
- The Guardian (2018) "Thousands join March for Our Lives anti-gun protests around the world; March for Our Lives draws huge numbers of protesters Trump spends weekend at Florida retreat of Mar-a-Lago March for Our Lives - live updates." *The Guardian*.
- The New York Times (2018a) " 'Code Red!' Mass Shooting Generation Raises Voices for Change." *The New York Times*, 1.
- The New York Times (2018b) "Clooney, Winfrey and Spielberg Donate Money for March Against Gun Violence." *The New York Times*.
- The Washington Post (2018a) "Down for gun control." *The Washington Post*, B02.

The Washington Post (2018b) “With Passion and Fury , Students March on Guns.” *The Washington Post*.

The Washington Post (2018c) “Metro ridership topped 558,000 on Saturday.” *The Washington Post*, B04.

東京新聞 (2018) 「『私には夢がある。銃のない世界だ』:銃規制へ数十万人『命の行進』」(2018年3月26日).

Yamine, Samantha Z., Christine Liu, Paige B. Jarreau and Imogen R. Coe (2018) “Social media for social change in science.” *Science*, 360 (6385):162-163.

(投稿日:2018年7月28日)

(受理日:2018年10月23日)